

## 投稿

## ハンガリーで驚いたこと

## ～ 家族同伴で観測?! ～

鳴沢真也（兵庫県立大学）、内藤博之（なよろ市立天文台）

## 1. はじめに

2016年8月下旬に私たちは、ハンガリーの主要な天文台を訪問する旅に出かけてきました。バヤ（Baja）天文台のティボル・ヘゲデューシュ（Dr. Tibor Hegedűs）台長（以下：ティボル）が、たいへんご多忙であったにもかかわらず、献身的に私たちを案内してくれました。たいへん有意義な旅行となりました。

ティボルは近接連星系の研究者で、鳴沢とは学生時代から親交があります。2回の来日経験があり[1][2]、持ち前の明るい性格から内藤とも親しくしています。ハンガリーはペレストロイカ以降、一般を対象とした天文普及・教育に力を入れています。この分野でも大活躍しているのがティボルなのです。公開天文台・プラネタリウムまたそこでの教育プログラム事業のプロデューサーやアドバイザーとして広く名前が知られています。ティボルがブダペシュト市内の大学の屋上に設置したプラネタリウムと天文台のドームを誇らしげに指差している姿が印象的でした。2019年には、国際天文学・天体物理学オリピック（IOAA）がハンガリーで開催されるそうで、主催者の一人のティボルは日本の高校生の参加者がいることに期待していました。

そんなティボルの計らいで、私たちはハンガリー科学アカデミーに属するコンコイ（Konkoly）天文台[3]でコロキウム発表をするという名誉に預かりました。この歴史ある天文台で講演する日本人は初めてのことだそうです[4]。鳴沢は主に日本の公開天文台の状況を、内藤は新星についてトークしました。

コンコイでは、Dr. Laszlo Kiss 台長が施設

を案内してくれました。この時に、RR Lyr型変光星の観測などで活躍した60cm屈折望遠鏡もを見せていただいたのですが、現在では引退したこの望遠鏡をやがて公開望遠鏡として現役復帰させる予定であることも伺いました[5]。

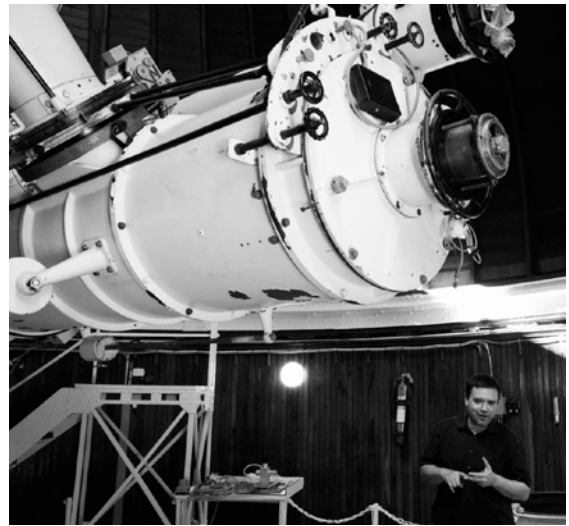


図1 60cm望遠鏡を案内してくれた Dr. Laszlo Kiss コンコイ天文台長。

## 2. Piskéztetőでビックリ

ハンガリーでは、たくさんのお話ししたい貴重な経験をしたのですが、その中でも特にご紹介したいことがあります。そもそもこれをお話しするために今回の投稿となりました。

ブダペシュトの北、80 kmのMátra山には、コンコイのステーションであるPiskéztető天文台があります（図2）。市街地から遠いので、夜になるとりゅう座の頭部の四角内にあるHD 161693（6等星）が肉眼でも見えました。

この“主砲”は1m反射鏡ですが、他に

もいくつかの望遠鏡が格納されているドームがあります。例えば 90 cm シュミットのことを言及すれば、最近では光度曲線の解釈ができないで、ひょっとするとダイソン球かもしれないと言われている謎の「ボヤジアン（KIC 8462852）」を初期の段階で撮影しています[6]。



図 2 Pizskéstető 天文台の冬は、想像を絶する寒さ？ 電気防寒着なる物がありました。人物はティボル。

これらの望遠鏡は、宿泊施設を兼ねた本館で自動制御されます。私たちが訪れたのは、観測がスタートする夕暮れ時でした。この日は、コンコイの Dr. Krisztián Sárnecky と Dr. Kuli Zoltán が観測をされていました。

実は、鳴沢は学生時代に読んだ磯部先生の著書[7]で、この天文台のことを知っていました。当時は冷戦時代でしたので、ハンガリーに入国するだけでもたいへんだったそうです。そのようなわけで、この天文台もいささか重い空気（場所なのか）と勝手にイメージしていました。

ところが！ 食堂でディナーを楽しんでから、リビングに行ってびっくりなのです。

なんとそこに小さな子どもたちがいるではないですか。そして美しく若い女性が二人も。

「ここは公開天文台ではないよね？ 住み込みの管理人さん？」

私たちは顔を見合わせました。実は、彼らはクリスチャンとクリーのご家族だったのです（図 3、4）。この天文台では、家族もいっしょに宿泊が可能なのです。子どもたちは、私たちが渡した姫路城の絵が描かれている抹茶団子のお土産の箱を嬉しそうに受け取ってくれました。

このリビング（の一角）は実は、望遠鏡の制御室にもなっていて、クリスチャンが監視するパソコンのディスプレイを奥様もそして、お嬢さんたちも興味深そうに覗き込んでいました。

子どもらが寝た後は静かにしないといけない、とティボルに言われていましたので、廊下を歩く時などは気を使いました。お風呂も少し離れて二箇所あるのですが、一つは職員と家族用らしく、私たちはもう一つを使わせてもらいました。



図 3 望遠鏡を監視する Dr. Krisztián Sárnecky とそのご家族。右は鳴沢。

このようにリビングで家族の顔を見ながら観測できる天文台というのは、日本では聞いたことがありません。頻繁に外国の天文台で観測している同僚らにも聞いてみましたが、そのような観測所があることを知っている者は一人もいませんでした（もし他の事例をご存知の読者がいたらご連絡ください）。



図 4 Dr. Kuli Zoltán のご家族

ちなみにクリスチャンは、新天体を数多く発見されている方です（この日、内藤はかの板垣公一さんが発見した 100 個の超新星の名前がプリントされている自作 T シャツを着ていたのですが、クリスチャンは板垣さんのこともご存知でした）。特に小惑星ではその発見数は実に 361 個にもものぼります。新天体の発見数を活動のバロメータの一つと考えるなら、このような成果があげられている要因には、家族同伴の宿泊もあるのかなと思いました。

夜勤務が続くと家族、特に子どもとは会話をする時間が減ってしまいます。場合によってはストレスがたまるかもしれません。きっとクリスチャンらの成果も、こうした天文台側の配慮があるからなのでしょう。また、家族が配偶者や親の仕事を理解する上でも画期的な方策だと感心しました。日本でもこういった制度を早く取り入れるべきではないでしょうか。翌朝は、そんなことを語りあいながらティボルが運転する日本車で Mátra 山を降りました。

## 文 献

[1] 鳴沢真也 (1998) 「ヘゲドューシュ博士がやってきた！」, 宇宙 NOW, 103:9.  
<http://www.nhao.jp/public/now/docs/now103.pdf>

[2] 鳴沢真也 (2015) 「ヘゲドューシュ博士再来」, 宇宙 NOW, 298:6.

<http://www.nhao.jp/public/now/docs/now298.pdf>

[3] 日本では「コンコリー」という表記がよくありますが、発音は「コンコイ」が近いです。またハンガリー国立天文台という表記もありますが、正確にはハンガリー科学アカデミーの所属です。

[4] <http://www.konkoly.hu/szeminar/szeminarium2016B.shtml>

[5] ハッブルが宇宙膨張を発見したかの 2.5m フッカー望遠鏡も 2014 年に一般公開用になり、西はりま天文台のなゆた望遠鏡を抜いて世界最大の公開望遠鏡となりました。今後も世界中で一般を対象とした公開事業が盛んになることでしょう。

[6] Boyajian, T. S., et al. (2016) 'Planet Hunters X. KIC 8462852 – Where's the flux?' *MNRAS*, 457: 3988.

[7] 磯部瑠三 (1983) 『世界の天文台』, 河出書房新書, pp.75-83.